

中学校の部

特選 自由図書部門

「悔しさをばねに」

池田町立池田中学校二年

鈴木 花音

読書感想文の宿題があると聞いて、率直に面倒だな…と思った。そもそも私は、そんなに本を読まない。だから、まずは本を選ぶところから始めなければならなかった。

「中学生 読書感想文 オススメ」そんな言葉で検索したときに出会ったのが、この「青春サプリ」の本だ。この本は、全五巻からなる部活動をテーマにした短編集である。すべて「実在の学校の、実在の人物の、実在のストーリー」をもとに構成されたものだ。知って、興味がわいた。その中から、私と同じ吹奏楽部が表紙になっていたものを選んだ。

北海道の北斗市立上磯中学校吹奏楽部は、全日本吹奏楽コンクールで最も注目を集め、「最強の中学校バンド」と呼ばれている学校である。北海道吹奏楽連盟のホームページを見ると、昨年度も全国大会で金賞をとっていた。昨年度だけではなく、2013年から、2014年と新型コロナウイルス感染症で中止になった年以外ずっとだ。そして、この本は、その2013年からの三年間の話である。

2013年に部長になったカイトは、これまで一度も進めたことのない全国大会出場を目指して練習に励んでいた。そんなときに飛び込んできた「悲報」が、顧問の先生の転勤だった。四月、新たに吹奏楽部の顧問になった中條先生は、これまで練習してきた自由曲も変更するという。私も、今まで一緒に頑張ってきた先生が急に代わるのは不安だし、練習してきた自由曲を変えられるのは嫌だ。カイトは、新しい先生をなかなか受け入れようとしない部員の思いを聞き、ミーティングを重ね、みんなの心を一つにしていた。部長として、本当に全国大会に行きたいという気持ちだが、そうさせたのだと思う。そして、部員たちの凄まじい努力の結果、全国大会初出場金賞という素晴らしい結果を残したのだ。

私がこの三年間の物語の中で、最も心に残った年は、全国大会に進めなかった2014年だ。その年の部長はカナ。「部員たちは泣いていた。カナも涙をこらえ切れなかった。」の一文が印象に残った。池中は、全国大会までを目指すような学校とは言えないが、カナの「悔しさ」には共感できた。私も今年の夏、初めてコンクールを経験した。自由曲の「ロメオとジュリエット」はとても難しい曲で、毎日必死になって練習した。コンクールメンバーを決めるオーディションでは、ものすごく緊張して、練習通りに吹けたかどうか、正直、何も覚えていない。コンクールは二種類あり、最初の中部日本吹奏楽コンクールでは、メンバーとして「ゴールド金賞」をとることができた。私自身も納得のいく演奏ができ、初めてのコンクールは楽しかった。

でも、その先の本大会には進めなかった。そして、本命の全日本吹奏楽コンクールで、私はメンバーになれなかった。池中は「ゴールド金賞」を受賞し、東海大会へ進めることになった。みんなはずごく喜んで、感動で泣いている部員もいたけど、私は喜べなかった。それよりも「なんで私はこのコンクールにのれなかったんだろう。」という悔しい気持ちの方が強く、本音というと、東海大会に行つて欲しくなかった。喜んでいるみんなの横で、何も感じないようにしながら、打楽器を片付けていた。必死に我慢をしていたけど、帰りの車の中では、悔しくて涙が出てきた。その後、東海大会に向けての練習が始まったが、メンバーではない私はそこに加わることはできず、みんなとの差がどんどん広がるのではないか、自分は下手になっていないかと不安でたまらなかった。それでも大会は補助員としてメンバーを支えた。

来年度、私は三年生になる。コンクールも最後の年だ。今年、東海大会に進んだから、当然、来年もそうありたいし、そうならなければと思うに違いない。少し違うかもしれないが、カナも、そんな二年目のプレッシャーは、すごかったのだと思う。上磯中学校は、「聴く人を喜ばせ、感動させる演奏」を目標に取り組んでいる。私は、ミスのない演奏をすることが一番よいと思っていて、自分のことしか考えていなかった。その時点で、大きな差がある。カイトもカナもその次に部長になったタカネも、先生の指示で動くのではなく、自分達でミーティングを開き、問題などがあれば自分達で解決方法を見つけ出している。

私は、部長などになる器ではないが、今年のような悔しい思いは、絶対にしたくない。ミスのない演奏ではなく、自分自身も楽しく、聴いている人が感動できるような演奏を目指して努力したい。何より、あの素晴らしいホールで演奏したいという気持ちが大きい。

この物語には、その他にも、卓球部・競技かるた部などの話があった。すべてに共通していることは、どんな困難にぶつかっても、顧問の先生と部員が信頼関係で結ばれ、同じ目標に向かって努力するところだ。私も思うようにできなくても諦めず、一つ一つ克服しながら、クラリネットを吹き続ける。



オザワ部長・日比野恭三・菊池高広・安藤隆人 作
『青春サプリー乗り越えられない試練なんてない』ポプラ社

【講評】

全体的にあらすじだけではなく、本の内容と自分の経験とを重ね合わせて、文章が書けています。特に、葛藤する自分の気持ちを、話の内容と照らし合わせて表現することや、本を読んだ感想を、これからの自分の未来につなげる形で表現できています。